

論 文（査読付）

BBC による公共サービス放送の正当性の根拠の変容

—1930 年代における放送の独占の崩壊から「言葉の戦争」へ—

飯塚浩一

The Transformation of the Basis to Justify the BBC's Public Service Broadcasting

: Collapsing Monopoly of Broadcasting and the 'War of Words' during 1930s in Britain

IIZUKA Koichi

Abstract

When the World War II broke out, the BBC had hesitated to decide its mission between the request for propaganda from the government and the idea of public service broadcasting, that is to improve the knowledge and taste of the public. The BBC, as losing the support of the audience, had decided to engage in the 'War of Words' to maintain the independence of the government and the idea of public service broadcasting.

To do this, the BBC had to shift the centre of gravity in the basis to justify its idea, not only from the support of the government to that of the public, but from the expectations toward the audience to those of the audience.

However this transformation of the basis to justify the public service broadcasting had already occurred when the collapsing BBC's monopoly of broadcasting and the change of the programming policy in the BBC had begun in the latter half of 1930s. Subsequently this transformation lead to the 'War of Words'.

1. はじめに

英国放送協会（British Broadcasting Corporation：以下、BBC）のオフィシャルサイトに掲げられている「使命、価値、そして公共の目的」では、「われわれの使命は『情報を与え、教育し、楽しませるための、公平で、高品質で、独自性のある番組とサービスの提供を通して、すべてのオーディエンスに奉仕するべく、公益に適う活動すること』¹と述べられており、これは、BBC が合弁会社であった時代に掲げた理念を受け継いでいる。

BBC にとってどのような番組を提供することが「すべてのオーディエンスに奉仕するべく、

公益に適う活動をすること」になるのか — 公共サービス放送 (Public Service Broadcasting) とは何か — は、政府が定めるものでもオーディエンスから求められるものでもなく、「自分自身で」考えて実践すべきことであり、それ故、公共サービス放送の存在と継続を正当化する根拠は、時々の政府やオーディエンスとの関係で変化せざるを得なかったのである。

1922年に英国放送会社 (British Broadcasting Company) として放送を開始し、1927年に公共事業体へと転換した BBC は、パターナリズム (paternalism: 父子主義) に基づき、大衆を教養ある、合理的判断力を持つ「国民」へと「教化」することを目的としていた。しかし、第二次世界大戦の勃発は、パターナリズムに基づく番組提供を続けていたのでは大衆からの支持を失うことを BBC に気づかせることになった。そこで BBC は、公共サービス放送の正当性の根拠の重心を、政府からの暗黙の支持 (パターナリズムへの同調) から大衆からの支持へ、オーディエンス「に対する期待」からオーディエンス「からの期待」へと移すことになった。パターナリズムに代えて実践されたのがエイサ・ブリッグス (Asa Briggs) が「言葉の戦争」(The War of Words) と呼んだ役割である。

「言葉の戦争」は、ブリッグスが著した英国放送史の基本的文献『英国放送史』全5巻シリーズのうちの第3巻の書名 (『言葉の戦争 1939-1945』) である。ブリッグスはこの書名を、第二次世界大戦中に英国外務省のもとに設置された、プロパガンダを担う政治戦執行部 (Political Warfare Executive: PWE) の部長を務めたロバート・ハミルトン・ブリューズ・ロックハート (Robert Hamilton Bruce Lockhart) の自叙伝『勘定書きを出す』(*Comes the Reckoning*, Putnam, 1947) で使われている「言葉の争い」(wordy warfare) をより直接的に表現するものと述べている²。「言葉の戦争」には、できる限り事実を伝えるという方針に沿った戦争報道のみならず、英国社会に根強い「やつら」(them) 対「おれたち」(us) の分断³において、これまで「やつら」の側として見られていた BBC を「おれたち」の目線に置くための方策、そして戦時であるが故に大衆の士気を持続するための娯楽の提供が含まれる。

しかしながら、こうした変化は戦時において急に起きたのではなく、1930年代後半に見られた BBC による放送の独占の事実上の崩壊と番組編成方針の転換によって始まっていた。そこで本稿では、BBC が掲げていた公共サービス放送の理念を具現化し、かつその理念の正当化の根拠ともなっていた放送の独占の崩壊と番組編成方針の変化が 1930年代後半にどのような要因によって始まり、その変化が戦争勃発によってどのように促進されたのかを考察することにした。

2. 公共サービス放送の成立

1922年、英国の通信省 (General Post Office) は、当時の代表的な無線機メーカーの共同出資により英国放送会社を設立することを決定した。こうした措置が取られた背景には、(1) 全てのラジオ製造業者が放送メディアの誕生と発展に参加することを保障する、(2) 周波数に関する混乱を避ける、(3) 全てのオーディエンスに対して効率的で満足のいくサービスを提供する、といった技術的・組織的理由があった⁴。BBC が社会的・政治的性格を与えられるのはそれ以

降であり、当初は「応急措置」としてこうした組織が設立されたのである⁵。この応急措置の中に、「ラジオは国家の希少資源であり、国益に照らして開発され、統制されるべきである」という考え方が盛り込まれていたため、サービスの提供を広告収入ではなく、ラジオ受信機を所有している全ての大衆によって支払われる受信許可料で賄うこととなり、BBC は年間収入を保障され、オーディエンスの希望にほとんど関心を払うことなく番組を制作することができた⁶。

BBC は、当時の保守党政府によって単純にその性格を定められたわけではなかった。1922 年 12 月 14 日、ジョン・チャールズ・ウォルサム・リース (John Charles Walsham Reith) が英国放送会社の総支配人 (General Manager) に就任したが (1927 年に BBC が公共事業体に転換した後は会長 (Director General))、リースは自らが掲げた同社の独自の目標について、1924 年に発行した自著の中で次のように説明している。「この事業をセンセーショナルリズムのための情報センター (clearing house) にすることは難しいことではなかったかもしれない。」

「我々の責任は、できうる限り最大の数の家庭へ、あらゆる人間活動の分野で生み出された最高の知識・努力・成果を届け、害となりえるものを排除することである。」「われわれは明らかに、大衆が必要としているであろうとわれわれが考えるものを大衆に与えようと試みているのであり、大衆が欲しているものを与えようとしていない、としばしば指摘される。しかし、大衆が欲しているものが何であるのかを知っている者はほとんどいないし、大衆が必要としているものが何であるのかを知っている者は全くいない。」⁷

その後、1926 年に政府が設置したクロフォード委員会 (Crawford Committee) は「放送サービスは国益の受託者である公共事業体によって担われるべきであり、その公共事業体の地位と義務は公共サービスを担う組織と同じものでなければならない」と勧告し、1927 年 1 月 1 日、英国放送会社は英国放送協会となるのだが、この時、同委員会は報告書の中でリースが掲げた理念に沿って、①公共の義務を果たす、②全ての大衆へ奉仕する、③娯楽だけでなく、情報を提供し教育を行う、という公共サービス放送の基本的な考え方を強調した⁸。

3. 文化の専制者としての BBC

1) リース流の公共サービス放送

放送のあり方についてのリースの考え方は、(1)財源の保障、(2)放送の独占、(3)社会統合の役割、(4)道徳的義務という 4 つの原則に基づいていた。第 1 の原則は、BBC はいかなる商業的な仕組みにも関与してはならない、というものである。BBC が広告収入で運用されることになれば、質の高い番組作りが大衆の好みに合わせようとする中で損なわれてしまうからである。第 2 の原則は、質の高い番組作りを保障するために、BBC は「独占の蛮力」 (brute force of monopoly)⁹を必要とする、というものである。競争による番組の質の低下を防ぎ、国民全体の文化水準の維持を図るためである。第 3 の原則は、放送は階級、地域、宗派を横断する国民的なものでなければならない、というものである。リースにとって放送は「社会統合を促進する強力な手段」¹⁰であった。そして第 4 の原則は、BBC は一種の道徳的義務を負うべきだという考え方であり、その基準となったものは「中産階級の倫理観、厳格なキリスト教の教義、貴族

的な文化、そして学校で教え込まれる道徳観」¹¹の混ざり合ったものであった¹²。

上記の原則に沿ってリースが掲げた公共サービス放送の使命は、当時の中産階級が抱いていたパターナリズムに基づき、労働者階級を「教養ある国民」にすることであった。労働者階級の意識と行動が英国社会においてどのように形成され、またそれが英国社会をどのように変化させてきたかを描いたセリーナ・トッド (Selina Todd) によれば、「生活費を稼がないと生きてゆけない労働者たちの階級であり、それゆえ他人の労働に依存して生きる金持ちたちと区別される人びと」¹³が、第一次世界大戦後に、失業・貧困状態が「当たり前」ではないのだと自覚し、1919年に暴動を起こし¹⁴、彼らの支持が労働党の勢力を拡大しつつあった。こうした時代状況のなかで、上記の第3の原則「社会統合の役割」は、中産階級の伝統的価値観を労働者階級に刷り込み、中産階級に対する敵対的姿勢をなくすことで、低賃金で厳しい生活を送ることは自らに原因があると思わせるものであり、労働者階級の生活状況を向上させることでも、階級の変更を可能にするものでもないことから、労働者階級を蔑視しつつ恐れていた政府も黙認したのである。

リースは、文化を「[人格の]完成を目指すための勉強部屋」(the study of perfection)、そして放送を「文化の従僕」(a servant of culture)であると定義した¹⁵。また、リースにとって、一般的に受け入れられている「娯楽」という言葉の意味は、単に「気持ちのよいことで心を満たす」だけで時間の無駄遣いに過ぎなかった。娯楽とは、「再生産や知識と経験の増大、人格の陶冶に向けた体系的で持続的な営みの一部」¹⁶でなければならなかった。彼にとって最も重要なことは、大衆に対して「どうやったら時間を、気持ち良いだけでなく、良い(well)ことに使えるか」¹⁷を示し、自己改善・自己規律の場を提供することであった。大衆とは「自分たちが何を欲しているのかも、何を必要としているのかも分かっていない」¹⁸文化的訓練が必要な不完全な国民であり、放送は「できる限り多くの家庭に、人間の生み出した知識、人間の努力の成果のうちで最高のものを届ける」¹⁹ことによって、彼らの教養を高めるために奉仕し、一般的な意味での娯楽(=非合理的のレクリエーション)に対する相殺手段として活用すべきものであった。

2) BBC が抱くオーディエンスに対する「期待」

1930年代には、ラジオの性能が向上して雑音が入らなくなると共に、価格も安くなったが、労働者階級にとっては、家庭にラジオが入ることは大きな出来事であった。「私たちが初めて店からラジオを運んできてスイッチを入れる瞬間は、スリリングだった。そして家族は集まって音楽を楽しんだ。これはまったく結婚式や初めて自転車に乗った時と同じで、このつまらない時代に私たちがめったに味わえないスリルを与えてくれる。」²⁰ラジオを購入できない大衆は、代わりに小額でレンタルできる中継装置でラジオ番組を楽しんだ。これは家の中に設置したラウドスピーカーに回線をつなぐもので、BBC が放送した番組をレンタル業者が録音して有線で再放送したが、電力料金はかからず、音声の質も良かったと言われている²¹。

1929年から1933年の間に、ラジオ受信許可証の所持者は倍増し、1935年には全人口の98%がなんらかの形でラジオ番組を聴くことができるようになり、映画や新聞やグラモフォンと同様に、ラジオは英国国民の生活に完全に組み込まれた²²。

ラジオが国民生活の一部に組み込まれた一方で、公共サービス放送の理念 — 教育・情報・娯楽を提供することで、大衆の知識と趣向のレベルを向上させる — は、オーディエンスに対するある「期待」(a set of expectations) — オーディエンスは提供される番組のなかから自分が聴くべきものを注意深く選択し、集中して聴くことで、BBC が理想的な仕事をするに役立ってくれる — に依存していた²³。BBC にとって「マイクの向こう側で、オーディエンスは自分に提供された番組から合理的な選択をするという明白な義務が課されているのだということ意識しなければならない」²⁴であり、BGM として終始つけっ放しにしておくことは好ましくなかったのである。

このようにラジオの聴き方にまで及ぶ「期待」を反映しかつ支えたのは、今日とは異なる番組編成方針であった。1930 年代の半ばまでの番組は、ある話題から次の話題へスムーズに流れるようにするためのアナウンサーの語りもなく、この後、どんな番組が流れるのかの紹介もなかった。番組と番組の間の空白の時間は、ちょっとした沈黙の安らぎの場所(oases of silence)として意図的に残され、スタジオの時計が秒を刻む音を聞かせ、オーディエンスがじっとしているよりむしろスイッチを切るのを促し、興奮させられた劇や音楽パフォーマンスの後で神経を落ち着かせることを促した。

こうした、固い番組と軽めの番組を混ぜ合わせた混合型の番組編成は、ある一定の期間(たいていは1ヵ月間)に、様々な趣向を持つオーディエンス(趣向によっては少数派にもなれば多数派にもなる)に対して番組を届けるためであった。さらに、固定された番組スケジュール(毎週、同じ曜日の同じ時間に番組を固定する)は、1、2の例外を除き避けられた。ニュース、宗教番組、チャリティの呼びかけのような特別な事項は別として、番組の大部分は、毎週、あちこちに分散して配置され、人気のあるトークシリーズや連続ドラマですら、時間帯が毎週著しく変化するため、追い続けることが容易ではなかった。さらに時間枠より早く終わったり、時間枠を超えてしまうことも普通であった²⁵。

4. BBC の独占の崩壊

1) 独占の崩壊の始まり

教育・情報・娯楽を提供することで、大衆の知識と趣向のレベルを向上させるという理念は、もしオーディエンスが BBC の他に大衆的趣向のみに特化した放送局という選択肢を得れば効果がないものになる。逆に言えば BBC は独占放送事業者として、オーディエンスを最大化することに生き残りをかける必要がなかったが故に、多様でバランスの取れた番組編成を維持し、少数派にもその趣向に応える番組を提供することができた。しかしたとえ大衆の多様な趣向が多様な番組によって満たされていたとしても、独占は選択の否定であることに変わりはない。そして、BBC の「期待」に反して、大半の大衆にとっては、階級や学歴に関係なく、ラジオはリラックスや娯楽のための家財に過ぎず(安楽で、日常的で、心地よい BGM)、しばしば、国家の危機や弔事、祝い事、スポーツがある時に限って国中の大衆が義務的に聴くものだった

²⁶。

BBC の「期待」が大衆から受け入れられないという現実、労働者階級のオーディエンスの大部分が、日曜日には BBC ではなく、後述するラジオ・ルクセンブルグ (Radio Luxembourg) の番組を聴くようになったことに表れている。日曜日は、ほぼ全ての大衆がラジオを自由に聴く時間を持てる日で、平日と違って大衆は気楽でリラックスできる番組を特に欲する気分になっているはずであるが、リースが命じたのは、大衆が聴くべき番組は午後 12 : 30 までは始まらず、宗教的内容 (religious services)、重要な事項に関するトーク (serious talks)、クラシック音楽によって大半が構成される番組編成であった。「リースの日曜日」(Reith's Sunday) と呼ばれたこの編成方針は、大衆の多くが欲する類の番組を提供するより、むしろオーディエンスを「改善する」(improve) という BBC の断固とした試みとして 1930 年代の末に至るまで維持された。

こうした現実に対して、ある起業家が、オーディエンスが喜ぶ番組を流して利益を上げるやり方を思いついた。BBC と通信省の間の協定下では、英国内には商業ラジオ局を設立できないため、解決策として南アイルランドかヨーロッパ大陸に放送局を設立して、そこから番組を送出するというやり方である。レオナルド・プラッジ大尉 (Captain Leonard Plugge)²⁷ は 1931 年、BBC の本部である放送会館 (Broadcasting House) のすぐ近くのオフィスに国際放送会社 (International Broadcasting Company) を構え、英国内に電波が届く範囲内にある海外局のいくつかの時間を購入した (フランスのトゥールーズ (Toulouse) とパリ、アイルランドのアスロン (Athlone))。そして、英国企業に広告スペースとしてその時間を販売し、実際の番組内容の編成は雇った番組司会者に委ねた。さらに同年、ラジオ・ノルマンディー (Radio Normandie) を設立し、フランスの北部沿岸フィキャンプ (Fécamp) から放送を開始した。主要な受信地域は南部イングランドであり、オーディエンスはアメリカのダンス音楽に満足したと言われている。12 か月以内に 21 の企業がスポンサーとなり、1934 年には広告で年に 40 万ポンドを稼いだとされている²⁸。

1933 年 6 月 4 日、プラッジ大尉の出資により、ラジオ・ルクセンブルグが開局する。同局は周波数割当機関である国際放送連合 (International Broadcasting Union : IBU) を無視して長波を勝手に利用し、ラジオ・ノルマンディーと同様にあからさまに大衆迎合的な番組を日曜日にだけ放送し、BBC に対する競争意図を宣言した。BBC は IBU に対して、ラジオ・ノルマンディーとラジオ・ルクセンブルグから電波を取り上げるように強く申し入れたものの、そのかいてもなく、1934 年には 90 の企業が商業局で商品の宣伝を行っていた²⁹。

ラジオ・ルクセンブルグは、音声による商売をしている、すなわち、いかなる広告主に対しても放送時間を買う (番組を提供するのは広告主であって放送局ではない) という理由で娯楽を提供することにお金をかけることなく、放送時間の販売から収入を得ることができた。番組を制作するのは広告企業 (advertising agencies) であり、なかでも 19 世紀末に創設されていた J・ウォルター・トムソン (Walter Thompson) とロンドン新聞協同組合 (London Press Exchange) が双璧であった³⁰。

BBC はこうした挑戦に対抗せざるを得なくなり、1936 年に聴取者調査局 (Listener Research Department) を設置したが、部分的には、オーディエンスが自分たちが制作した番組をどのよ

うに捉えているのかについて本当の情報を知りたいという番組制作者たちからの圧力を受けての設置であった。最初の調査の結果、日曜日に大量のオーディエンス（82 パーセント）が大陸側の商業局の番組を聴いていることが判明した。リースは、もしオーディエンスが、継続的に軽い番組が流れる編成か、それとも固い番組と軽い番組を混ぜた編成かという選択肢を得れば、前者へと惹かれるだろうと危惧していたが、それは正しかった。リース流の公共サービス放送の理念は、BBC の独占が事実上崩れた瞬間に危機に晒されることになったのである³¹。

上記の調査結果を受けて 1937 年から開戦前夜までは、バラエティー局（Variety Department）が BBC の番組編成においてより大きな影響力を持つようになり、バラエティー番組の「今夜の街中」（In Town Tonight）、「月曜の夜 7 時」（Monday Night at Seven）、「バンド・ワゴン」（Band Wagon）³²が BBC の看板番組になった。1930 年代の終わりには、聴取者が参加するゲームやクイズ番組の数が増え、聴取者のリクエストに応じてレコードをかけるリクエスト番組も登場した。こうした番組は、BBC の草創期への復帰でもあった。当時の地方局では、クイズ、ゲーム、リクエスト番組、電話参加番組など、聴取者が番組にアクセスできる番組が多数放送されていた。BBC が公共事業体になったことでこれらの番組が一掃され、会社時代にあった放送事業者と聴取者の友好関係が消滅していたのである³³。

2) 第二次世界大戦の勃発と BBC

1939 年 9 月 1 日、ドイツ軍がポーランドへ侵攻すると、地域放送 (Regional Program) は直ちに閉鎖され、全国放送 (National Program) は海外放送 (Overseas Program) と区別するため国内放送 (Home Service) に変更された。BBC はロンドンにある放送施設のいくつかをオックスフォード (Oxford)、エバーシャム (Evesham)、ブリストル (Bristol)、マンチェスター (Manchester)、グラスゴウ (Glasgow) へ移転させ、全国ネットワークと地方ネットワークを単一の国内放送へ統合した。生命が危機にさらされているが故に、番組は単調なものではなければならないと考え、公的発表、BBC 劇場でのサンディー・マクファーソン (Sandy Macpherson) によるオルガンコンサート、閣僚による激励演説 (pep talks)、そしてグラモフォンによる音楽という活気のないルーティン化された番組を提供した。定時ニュースは厳粛な音楽や美辞麗句とともに放送され（「希望と栄光の国」(Land of Hope and Glor) の演奏、シェークスピアの作品の朗読など）、ドイツ人とイタリア人の作曲家による 80 曲が禁止リストに記載された³⁴。何を聴くべきかを指示するパターンリズムは容易には消滅しなかったのである。

開戦の一か月後に BBC の聴取者調査局がオーディエンスの反応を調査したところ、オーディエンスの 35 パーセントが BBC に不満を持ち、10 パーセントは全く聴かないと回答し、対照的に、ナチス政権に協力する英国人ウィリアム・ジョイス (William Joyce) による放送が多くの関心を集めた。1939 年、ドイツのハンブルクの放送局から物憂げながら非常に洗練された口調で英国の大衆へ語り掛けるジョイスはホー・ホー卿 (Lord Haw-Haw) というニックネームを与えられ、ちょっと気味悪いジョークを話すとして人気があった³⁵。

1940 年 1 月、BBC は第 2 の国内ネットワークとして「軍向け放送」(Force Programme) を開設した。フランスへの英国海外派遣軍 (British Expeditionary Force) を編成する兵士の士気

を維持することを目的とした軍当局からの圧力を受けてのことであった。当初は、BBC の伝統に沿った軽音楽＝軽めのクラシック音楽を放送したが、軍人には不評であった。連合軍首脳部が、軍人たちに人気があったフランスの英語商業放送局「Radio Fécamp」を閉鎖すると不満がさらに増大することとなり、BBC は軍に奉仕する大衆の要望に応えなければならなくなった。娯楽と過度な努力を要しない番組が兵士たちの退屈を晴らすと期待し、彼らが聴きたいもの — ダンス音楽、スポーツ、バラエティー — を与えるための娯楽事業が実施されたのである。同番組はダンケルク撤退(Dunkirk)³⁶の後、BBC のオーディエンスの 70 パーセントを獲得する多数派チャンネルになった³⁷。

「軍向け放送」に対するオーディエンスの対応は、戦前の BBC のすべての諸原則を一挙に逆転することになった。当初、BBC は、「軍向け放送」は国民の士気を維持するための便宜的な手段であり、オーディエンスの多くは、より固い番組を流す国内放送に対して忠誠を維持すると想定していた。しかし、全面戦争がもたらす多種多様なニーズと責務が、英国政府に対して世論と国民の欲求により大きな注意を払うことを強いるようになると、BBC も自らを大衆の要求に適合させる必要が生じることとなった。もはや大衆の趣向をリードし改革するのではなく、大衆の趣向に合わせる、あるいはそれを予測しなければならなくなったのである³⁸。

戦前、リースと彼の後任のフレデリック・オギルビー(Frederick Ogilvie)は、固い番組と軽めの番組を組み合わせた混合編成に固執していた。混合編成は国民の文化的趣向の改善にとって重要であり、もし、固い番組と軽めの番組がそれぞれ別のネットワークで放送されると、オーディエンスは BBC の番組が有する広範囲にわたる豊かな内容に触れることができなくなると考えたからである。しかしながら、戦時の一時的な手段と捉えていた「軍向け放送」に対するオーディエンスからの人気は、混合型の番組編成への単純な復帰を許さないことが間もなく明らかになった。

5. BBC の「言葉の戦争」

戦時内閣³⁹は、放送は強力なプロパガンダの武器であり、BBC は情報省(Ministry of Information)⁴⁰に対して絶対的に服従する義務があると考えた。要するに、政府にとって都合の良い情報を都合の良いタイミングで流すということである。しかしながら BBC はどのような事実も隠さずに即座に告げることがオーディエンスの信頼を得る方策であると考え、この方針に固執することで政府の諸官庁からの独立をある程度維持し続けることができた⁴¹。

実際のところ、国王の特許状(Royal Charter)によって定められている BBC の憲政上の位置づけからも、BBC を政府機関の一部として接収することは困難であり、かつ、情報省も、統制するにしても具体的に何をどうすれば良いのかが分からず、結果として「何をどう伝えるか」については BBC の裁量が大きくなったのである⁴²。

しかしながら、大衆の信頼と言っても、単に事実を伝える姿勢を守るだけでは、オーディエンスにとっては正しい情報を得られるという期待を高めることにつながっても、「BBC は自分たちと一緒に困難に立ち向かっている」という感情面での信頼を引き出し、モラルの維

持につなげることは難しかった。加えて 1920 年代から 30 年代にかけて、英国社会は、より豊かな生活を享受する層と、失業・貧困に苦しむ層に二極化し、政界も保守党対労働党という形に再編成されていたが、同時にこの二大政党の対峙が、中産階級である「やつら」(them)と労働者階級である「おれたち」(us)と呼ばれる伝統的な階級配置の形成と固定化を促していた⁴³。BBC は、職員の多くが所属する階級と、それまでのパターンリズムに基づく姿勢から「やつら」の側にいることは明白だった。そこで、これまで「やつら」の側として見られていた BBC を「おれたち」の目線に置くための方策、そして戦時であるが故に大衆の士気を持続するための娯楽の提供が「言葉の戦争」として実践されたのである。

1) 戦時下のニュース番組

戦前の BBC のニュース速報は原稿をただ読み上げるだけであったが、戦時には音声メディアにとって重要となる統語論(syntax)と語彙(vocabulary)に関心が向けられた。すなわち、ニュースキャスターが原稿を読み上げる際のアクセントや言葉遣いがより広くオーディエンスを代表していることに関心が向けられたのである。例えばラジオ・パーソナリティーのウィルフレッド・ピックルス(Wilfred Pickles)は、明白なヨークシャー訛りで挨拶することで、オーディエンスとの一体感を醸し出した。戦争が続くと、取材体制はより組織的で効率的になり、1944 年から BBC は独自の特派員を任命し始めた。さらに 1940 年には、ラジオ・ニュースリール(Radio Newsreel)のようなより拡大されたニュース番組を開始した。ニュースの読み上げ、特派員の報告、アクチュアリティ(actuality: 現実感)、コメントを結び付けることでニュースに深みと展望を与える技術が必要になったのである⁴⁴。

録音技術の改善は戦場からの BBC 特派員の報告において劇的な効果をもたらした。リチャード・ディンブレビー(Richard Dimbleby)とワインフォード・ボーガン・トーマス(Wynford Vaughan-Thomas)は、兵士と同じ訓練を受け、熟練した編集技術を持ち、コメントとアクチュアリティを強力に統合することができる前線特派員として、持ち運びのできるディスクレコーダー(portable disc recorders)を携えて戦場に向かった(40 ポンドの機材と 12 枚のディスク)。戦場における兵士たち＝「おれたち」の目線での報道を目指したのである。1944 年 6 月 6 日の D-Day⁴⁵には、BBC は別の拡大ニュース番組「戦争報告」(War Report)を開始し、英国だけで 1000～1500 万人のレギュラー・オーディエンスを獲得した⁴⁶。

1944 年に BBC のスポークスマンが「かつてはニュースはそれほど大きな重要性を持たなかった。今や最大の番組時間量を占め、教養番組を背後に押しやった」⁴⁷と認めたように、ラジオニュースは戦争中に革新的な変化を遂げ、BBC の番組の中心に位置づけられた。BBC のニュース速報に定期的にチャンネルを合わせるオーディエンスは全人口の 30～50 パーセントに上り、D-Day の夜は全人口の 80 パーセントがニュース速報に耳を傾けたとされる。全国ニュース(特に夜 9:00 の Nine O'clock News)にチャンネルを合わせるという行為に、自国がどのような戦いを展開しているのか、自分たちの共通の目的は何かということについての国民の共通の感覚が最も明確に示されたのである⁴⁸。

2) 戦時下の娯楽番組

1939年に「バンド・ワゴン」が終了した後、バラエティー局は熟練したラジオ芸人のトミー・ハンドレイ(Tommy Handley)を中心とするバラエティー番組「またあの男だ」(It's That Man Again)を制作した。このタイトルは大衆紙の『デイリー・エクスプレス』(Daily Express)がアドルフ・ヒトラー(Adolf Hitler)の最新の動向を告げる際にしばしば用いていた見出しから借りてきたものであり、最初はそれほど注目されなかったものの、戦争の勃発によって「ITMA」の愛称とともにオーディエンスが増大した。この番組のすべてのエピソードにおいてハンドレイは儀式のマスターを演じ、モップ夫人(Mrs. Mopp)、チンスタップ大佐(Colonel Chinstap)、ドイツ人スパイのファンフ(Funf the German spy)、アリ・オップ(Ali Oop)といった多数の登場人物が連続して訪れる。色々なハンドル、錠、染みが付いたドアがあり、登場人物はオーディエンスに聞こえるように異なった入り方をして、ハンドレイと早口で掛け合いをして、ボタンという音とともに去る。スピード、驚き、めまぐるしく変わる現実という、見えないメディアの固有の性質をうまく利用した、ラジオならではの構成だった⁴⁹。

音楽は、ポピュラー音楽であれクラシック音楽であれ、ライブであれ録音であれ、何時間も繰り返し流され、新鮮味はなくとも家庭にいる大衆にとって慰めとなる存在だった。政府とBBCは共同で、国民の士気と生産性の向上のために音楽を利用した。1940年6月、「作業中の音楽」(Music While You Work)という30分間の音楽番組が日に2回放送され、工場内のラウドスピーカーによる中継が始まった。同番組はダンケルク撤退の3週間後に開始され、ノンストップで軽快な大衆的楽曲をすべて同じテンポで途切れなく流すことで、着実な割合で大量生産を維持することを目的とした(特に女性労働者を対象とした)。1944年には8000以上の工場で計4500万人以上の労働者が聴いたとされ、1967年まで継続した⁵⁰。

士気や生産性を高めることを目的としたもう一つの番組が、1941年に始まった「働く人のための休み時間」(Workers' Playtime)である。労働大臣であったアーネスト・ベヴァン(Ernest Bevin)の創案によるもので、アマチュアとプロのエンターテイナーが一緒に出演し、オーディエンスが歌える歌を軍需工場や他の工場へ届けたとされ、1964年まで継続した⁵¹。

しかしながら、すべての娯楽が「軽い」娯楽だったわけではない。1940年6月5日から数か月間、「あとがき」(Postscript)というタイトルで、小説家・劇作家としても有名であったJ・B・プリーストリー(Priestley)が、ヨークシャーなまりで、BBCの放送の特徴だった注意深く堅苦しく退屈な話ではなく、普通の男女の関心・感情に沿った「トーク」を展開した。彼は普通の人びとに対して、普通の人びとのために語り掛けた。決然とした冷静な口調が確実に国民の気持ちを捉え、平均3名に1名が聴取したと言われている。当初は戦争中の生活についての素朴な話題を取り上げていたが、次第に戦後の英国はどんな生活になるのかを論じ始め、1930年代の状況に戻ることはあり得ないと強調するようになった。この戦後の生活についての言及は、保守党議員から左翼的であるとして批判され、プリーストリーは10月に番組を離れることとなった⁵²。

プリーストリーと並んで、この時期の重要なラジオ・パーソナリティーを務めたのは、1940

年の「我々は、我々自身のために語る」(We Speak for Ourselves) のシリーズを担当した、やはりヨークシャーなまりのピックルスであった。彼は様々な地方へ行き、普通の大衆に彼らの職場で会い、彼らがどのようにして戦争の試練と苦難に恐れずに立ち向かい、ナチスを倒すために喜んで犠牲を払おうとしているかを伝えた。ピックルスに言わせれば「プロパガンダを娯楽で偽装した」のであったが、1942 年、侵略の恐怖が薄れるとともに、オーディエンスの多くは番組をこのように見るようになり、打ち切られることになった⁵³。

1941 年 6 月に始まった「信頼の頭脳」(The Brains Trust) は、オーディエンスからの質問に対して有名人が回答する、日曜日のティータイムの 5 分間の「高尚な」討論番組である。回答者には哲学者のシジル・ジョド(Cyril Joad)、動物学者のジュリアン・ハクスリー(Julian Huxley)、生物学者兼小説家のオルダス・ハクスリー(Aldous Huxley)、海軍中佐 A・B・キャンベル(Campbell)、退役海軍中佐の A・B・マーシャル(Marshall)といった有名人が含まれていた。完全な即興で放送された哲学や芸術や化学の問題に取り組む同番組は、大量のオーディエンスを獲得した最初の「固い」番組となり、すぐに夜 9 時のニュースの直後の時間帯に移動した。質問には「ハエはどうやって天井を歩くのか？」や「牛はなぜ前足を先に上げるのか？」といったものも含まれており、正解ではなく、こうした質問をめぐる回答者間の会話が人気を集めたと推測されている⁵⁴。

6. おわりに

BBC は 1922 年の放送開始以降、パターンリズム、すなわち大衆(主として労働者階級)の欲求に応えるのではなく、大衆にとって(本人たちは知らない)ニーズと想定されるものを提供することで大衆の欲望からの自律性を保つとともに、中産階級の価値観を大衆に刷り込むという理念を掲げることで政府からの暗黙の支持を得た。

しかし、1930 年代に入ると、大陸側から流される商業放送局の番組によって放送の独占が崩壊し、公共サービス放送の理念とオーディエンスが持つ一貫した軽めの趣向の間に妥協点を見出すべく、1930 年代後半から番組編成の方針を徐々に変更することになった。さらに戦争という緊急事態が起こり、政府からの自律性を保つためには政府とオーディエンスの間で何を追求すべきかを決断し実行する必要性に迫られ、「言葉の戦争」を実践することになった。

英国放送史において BBC の戦争中の最大の成功と言われているのは、プロパガンダよりも事実を伝えるという方針を守ったこと、意識的に嘘をつくのを避け、歪曲を避け、敵側の放送局に対して有利な地位を得たことである。悪いニュースを伝えたが故に — 1942 年 11 月のエル・アラメイン(El Alamein)での勝利⁵⁵までは悪いニュースしかなかった — 良いニュースもまた信用され、占領下にある大陸諸国の人々からも頼りにされることになった⁵⁶。

しかしより重要なことは、単に事実を伝えるだけではなく、BBC が「おれたち」の側と一緒に戦っているという感情面での信頼を得ようとしたことである。より広くオーディエンスを代表するアクセントや言葉遣いを取り入れ、「おれたち」の目線での報道を目指して戦場へ特派員を派遣し、戦時であるが故に大衆の士気を持続するための娯楽を提供することを通して BBC

が銃後(home front)で闘っている大衆と経験を共有したのである⁵⁷。

こうして「言葉の戦争」が実践された結果、混合型の番組編成から固定型の番組編成への変化と、階層化したネットワークによる大衆的な趣向に合わせた番組の提供が促進されることとなり、1945年の戦争終結後は、混合型の番組編成は完全に放棄され、BBC ラジオは3つの専門チャンネル— Light Programme (娯楽とポピュラー音楽)、Home Service (トーク、プレイ、ニュース)、Third Programme (クラシック音楽) —に分割されることになった⁵⁸。

このように、1930年代後半に見られたBBCによる放送の独占の事実上の崩壊と番組編成の方針転換が、戦時体制下でBBCが大衆からの期待を求めて実践した「言葉の戦争」によって促進されたことで大衆に選択肢が提供されることになった。このことは番組を「聴かせる」ことを当然視していたパターンリズムが、もはや公共サービス放送の正当性の根拠としては機能せず、「聴く価値がある」と大衆から期待されることを根拠とせざるを得なくなったことを意味している。

こうして「放送の独占」を正当化する根拠としてのパターンリズムが放棄されたことは、戦後の民間放送開始(ラジオは1973年、テレビジョンは1955年)への糸口となった。「情報を与え、教育し、楽しませる」という公共サービス放送の目的はBBCのみならず民間放送にも適用されたことから、BBCは受信許可料を独占する正当性の根拠を、特許状が更新期限を迎えるたびに示さねばならなくなったのである。

デジタル化時代を迎えて電波による放送という伝送手段との一体性が崩れた今日、他の事業者と比べてもっとも「聴く(見る)価値がある」番組の基準を「自分自身で」考え、その基準の正しさを実際の番組を通じて大衆に証明し続けることが、公共サービス放送の正当性の根拠となっているとさえ言う。

註

¹ Our mission is "to act in the public interest, serving all audiences through the provision of impartial, high-quality and distinctive output and services which inform, educate and entertain" <https://www.bbc.co.uk/aboutthebbc/governance/mission>

² Asa Briggs, *The History of Broadcasting in the United Kingdom Volume III: The War of Words 1939-1945*, Oxford University Press, 1995, p.3. 参照。ブリッグスは、それまでの大半の英国の戦争史は戦争指導者たちを中心としたものであり、戦時中にBBCが果たした役割はなぜか「勘定に入っていなかった」こと、そして戦時中にBBCの構造や機能、番組が大きく変化し、ラジオは戦争の手段になると同時に、やすらぎと激励を与えるものに変化したと指摘している。

³ 「やつら」と「おれたち」の分断については本稿の第5節で改めて述べるが、これは、英国文化史家のリチャード・ホガート(Richard Hoggart)が『読み書き能力の効用』(香内三郎訳、晶文社全書、1974年)で描写した、中産階級(やつら)に対する労働者階級(おれたち)の敵意を象徴する言葉である。ホガートは労働者階級から見た「やつら」の姿を次のとおり描写している。(64頁)

「やつら」には、警官、労働者階級が直接接触する公務員、地方公共団体の雇傭者—教師、学校関係者、「都市自治体」の職員、地方裁判所の関係者、がふくまれる。かつては、家計調査(失業手当を出すかどうかの)役人、「貧民救済委員会」からくる男、職安の職員、がここでは目立つ存在だった。とくに、ひじょうに貧しい大衆にとって、かれらは、影のようにぼんやりした、だがほとんどの点でもかれらの生活を支配する、数の多い力強い集団として映っている。世界は「やつら」と「おれたち」に分けられる。「かれら」は「頭にいる連中」、「ずっと上のほうにいるやつら」、つまり失業救済金をくれ、よびつけ、戦争に行けといい、罰金をとり、三〇年代には失業手当をもらえる家計調査基準に合格するために

家族を分裂させた連中、「ともかくそこから逃げられない奴」、「本気で信用できねえやつら」、「生意気な口をきき」、「ほんとうにみんなひねくれた野郎ども」、「決してほんとのことを教えない」（たとえば、病院に入っている親類について）、「有無を言わず刑務所へほうりこむ」、「スキさえありゃあ、いつでも人をやつつける」、「お前を召喚する」、「みんなグルになってやがる」、「人をなんか汚ないもののように扱う」、連中なのだ。

⁴ Ralph Negrine, *Politics and the Mass Media in Britain*, Second edition, Routledge, 1994, p.82. 参照。

⁵ P. Eckersley, *The Power Behind the Microphone*, Cape, 1941, p.18. 参照。

⁶ BBC の公共サービス放送の理念については、例えば次の文献を参照 — 簗葉信弘『BBC イギリス放送協会 パブリック・サービスの伝統』（東信堂、2002 年 2 月）、飯塚浩一「戦間期の英国社会における「放送」の成立 — 一九二二〜一九二六年における BBC の変容 —」（『メディア史研究』第 13 号、2002 年 11 月）、津田正太郎「「公共放送」という理念—ジョン・リースにおける BBC の独立の意義—」（『マス・コミュニケーション研究』第 68 号、2006 年）、大蔵雄之助「第 2 章 BBC の設立と理念」（原麻里子・柴山哲也編著『公共放送 BBC の研究』（ミネルヴァ書房、2011 年）。なお、英国の研究者による代表的な文献としては、Asa Briggs, *The BBC: The First Fifty Years*, Oxford University Press, 1985 ; John Cain, *The BBC: 70 years of broadcasting*, BBC, 1992 ; Asa Briggs, *The History of Broadcasting in the United Kingdom Volume I: The Birth of Broadcasting 1896-1927*, Oxford University Press, 1995 ; Asa Briggs, *The History of Broadcasting in the United Kingdom Volume II: The Golden Age of Wireless 1927-1939*, Oxford University Press, 1995 ; Andrew Crisell, *An Introductory History of British Broadcasting*, Second edition, Routledge, 2005 ; David Hendy, *The BBC: A People's History*, Profile Books Ltd, 2022 ; Robert Seater, *Broadcasting Britain: 100 years of the BBC*, Dorling Kindersley Limited, 2022 ; Simon J. Potter, *This is the BBC: Entertaining the Nation, Speaking for Britain? 1922-2022*, Oxford University Press, 2022. を参照。

⁷ J.C.W. Reith, *Broadcast Over Britain*, Hodder & Stoughton, 1924, p.34.

⁸ *Report of the Committee on the Future of Broadcasting*, HMSO, Cmnd.6753, 1977, p.9.

⁹ J. C. W. Reith, *Into the Wind*, Hodder & Stoughton, 1949, p.99. なお、リースは、もし独占の蛮力がなければ「ほとんどすべてが異なっていたかもしれない。BBC は安全運転をしなければならなかったかもしれない。明らかに大衆的な方向へ進んでいたかもしれない。顧客の数を数えていたかもしれない。人気投票に身を委ねていたかもしれない。“かもしれない” がしなければならないだったかもしれない。」(p.100) とも同書の中で述べている。

¹⁰ Paddy Scannell and David Cardiff, *A Social History of British Broadcasting Volume One 1922-1939 Serving the Nation*, Basil Blackwell, 1991, p.7.

¹¹ Peter Golding, *The Mass Media*, Longman, 1974, pp.34-35.

¹² こうした原則に基づいて、1920・30 年代に BBC が展開した文化面での実践（標準英語の採用、教育放送の開始、クラシック音楽に対する支援、バラエティー番組の「質」の維持）については、飯塚浩一「英国における文化統治の手段としての公共サービス放送の形成」（『法学研究』第 84 巻第 2 号、2011 年 2 月、慶應義塾大学法学研究会）を参照。

¹³ セリーナ・トッド『ザ・ピープル イギリス労働者階級の盛衰』近藤康裕訳、みすず書房、2016 年、134 頁。

¹⁴ 「戦争が終わるころ、五十万世帯の家族が新しい住居を必要としていたが、政府はそれを法制化したのちも地方自治体への直接的な援助をおこなわず、一九二一年までにわずか二十一万四千戸の家が建てられただけであった。

その直接的な結果として叛乱が起きた。一九一九年、暴動が主要な都市と町のほとんどで発生した。グラスゴー、ルートンとうまっとく異なった場所で起きた行為運動を鎮圧するのに警察と軍は悪戦苦闘を強いられた。」前掲書、43 頁

¹⁵ J.C.W. Reith, op.cit., p.217. なお、19 世紀後半には、代表的な社会改革論者であったマシュー・アーノルド (Matthew Arnold) が、民主主義と読み書き能力の拡大による大衆の台頭によって生じた社会秩序の混乱に対する処方箋として教養が持つ効用を示した『教養と無秩序』(Culture & Anarchy, 1869 年) を刊行し、人びとの社会的・道徳的関心をつぎつぎに結びつける要になるものとして「文化」(culture) を位置づけた。この時、アーノルドは「文化」に対して「我々にとってもっともかかわりの深い事柄全般にわたって、この世で今まで考えられ述べてきたなかで最上のものを知ろうとすることによって、全人的完成を追求すること」という、人格陶冶のための訓練という定義を与えた。

¹⁶ Ibid., p.17.

¹⁷ Ibid., p.17.

¹⁸ Ibid., p.34.

¹⁹ Ibid., p.34

²⁰ Andrew Crisell, *Understanding Radio*, Routledge, 1994, p.19.

²¹ Kevin Williams, *Get me a Murder a Day! : A History of Mass Communication in Britain*, Arnold, 1998, p.101.参照。

²² D. L. LeMahieu, 'British Broadcasting Corporation (BBC)', in F. M. Leventhal(ed.), *Twentieth-Century Britain : An Encyclopedia*, Garland Publishing, 1995, pp.101-102. 参照。なお、BBC のオフィシャルサイトに記載されている説明によれば、1930 年代、BBC の番組は、ニュースからトーク、音楽演奏、スポーツ中継、子供向け番組まで幅広い領域に及んだ。1930 年には BBC シンフォニー・オーケストラが設立された。教育はリースにとって重要な優先順位であり、学校放送は 1930 年代の末まで、8000 以上の学校で聴かれていた。屋外での放送は、フットボール、クリケット、ラグビー、ボートレースなどのスポーツ中継が主であり、バラエティー番組は数百万人のオーディエンスを惹きつけた。中でもアーサー・アスキー(Arthur Askey)とリチャード・マードック(Richard Murdoch)の「バンド・ワゴン」(Band Wagon)と、トミー・ハンドレイ(Tommy Handley)の ITMA(It's That Man Again)は多くのファンを獲得したが、趣味のよさと上品さが求められ、宗教など微妙な問題については詳細なガイドラインが与えられた。1932 年、BBC は最初の放送本部であったサヴォイ・ヒル(Savoy Hill)を去って、ポートランド・プレイス(Portland Place)にある放送会館(Broadcasting House)へ移った。この印象的なアール・デコ調の建物は、間もなくロンドンのランドマークになり、「新ロンドン塔」(a new Tower of London)と呼ばれるようになった。また同年、1932 年、エンパイア・サービス(Empire Service)を開始(後に BBC World Service となる)、直後に、国王ジョージ V 世が帝国領土向けに初のラジオ放送を行なった。1938 年には最初の外国語放送(アラビア語)を開始し、第二次世界大戦前夜には、ヨーロッパ向けにフランス語、ドイツ語、イタリア語、ポルトガル語、スペイン語、英語放送を実施した。

<http://www.bbc.co.uk/heritage/story/index.shtml> ただし、このページは現在では削除されている。

²³ Paddy Scannell and David Cardiff, 'Serving the Nation : Public Service Broadcasting before the War', in Bernard Waites, Tony Bennett and Graham Martin (eds.), *Popular Culture : Past and Present*, Routledge, 1993, p.185.参照。

²⁴ *BBC Yearbook*, 1930, p.60.

²⁵ Paddy Scannell and David Cardiff, op.cit., pp.185-186.参照。

²⁶ Ibid., p.186.参照。

²⁷ 空軍大尉、後に保守党庶民院議員。

²⁸ Andrew Crisell, *An Introductory History of British Broadcasting*, Second edition, Routledge, 2005. p.51.参照。

²⁹ Ibid., p.51.参照。

³⁰ Ibid., p.51.参照。

³¹ Ibid., p.52.参照。

³² 「バンド・ワゴン」は 1938 年に放送が開始された。もともとは音楽ショーとして企画されたものの、アーサー・アスキー(Arthur Askey)とリチャード・マードック(Richard Murdoch)が演じる幕間演芸が含まれていた。短いギャグとシットコムの伝統的な融合が特徴であり、アスキーとマードックは放送会館の最上階の想像上のフラットの住人として登場し、ラジオの不可視性を超現実主義の要素で覆した。BBC が、戦争の予感に不安を感じる国民に安らぎを与える必要があると考え、毎週、同じ時間帯にこのバラエティー番組を放送したもので、ヒトラーについてのジョークを使うことが許可され、笑いのネタのトップになった。Andrew Crisell, op.cit. p.62.参照。

³³ 飯塚浩一「英国における<社会制度>としての BBC の成立」(『東海大学紀要文学部』第 88 輯、2008 年 3 月)、77-78 頁、参照。

³⁴ Andrew Crisell, op.cit., p.59.及び Kevin Williams, op.cit., p.145.参照。

³⁵ Andrew Crisell, op.cit., p.59.参照。

³⁶ 第二次世界大戦の西部戦線における戦闘の一つで、ドイツ軍のフランス侵攻の 1940 年 5 月 24 日から 6 月 4 日の間に起こった戦闘。輸送船の他に小型艇、駆逐艦、民間船などを動員した史上最大の撤退作戦。

³⁷ Andrew Crisell, op.cit., pp.59-60.及び Paddy Scannell and David Cardiff, op.cit., p.187.参照。

³⁸ Andrew Crisell, op.cit., p.60.参照。なお、1942 年末、BBC は海外に駐屯している兵士のために「総合海外放送」(General Overseas Service)を立ち上げた。1944 年 2 月、ドイツ占領下のフランスへの侵攻が差し迫り、大半の軍隊が海外へ移動する時、BBC は 2 つのネットワークを「総合軍向け放送」(General Forces Programme)に統合した。

³⁹ 1940 年 5 月 10 日に首相のネヴィル・チェンバレン(Neville Chamberlain)の辞任を受けてウィンストン・チャーチル(Winston Churchill)が労働党から党首クレメント・アトリー(Clement Attlee)らを閣僚に迎えて樹立した連立政府。1945 年 5 月 8 日のドイツ降伏後の 5 月 23 日まで継続。

⁴⁰ 英国で戦時に設置される情報統制を担う政府機関。戦争勃発から 10 日後、BBC 経営委員会が委員長と副委員長の 2 名に減員することが発表された時、情報省が発足した。経営委員会委員長は、戦争遂行に関する事項については、政府が最終的な権限を持つことを受け入れることを明言したのだが、その後数か月間は BBC への独断的な介入を行うなど、統制とは何をすることかを理解していなかったことから混乱を招くことになった。なお、戦時内閣で王璽尚書 (Lord Privy Seal) を務め、後に副首相となるクレメント・アトリー (Clement Attlee) は、BBC の活力を奪うような政策に強く疑問を投げかけた。John Cain, *The BBC: 70 years of broadcasting*, BBC, 1992, p.46. 参照。

⁴¹ 例えば、1940 年 6 月 8 日のノルウェー沖海戦について、BBC は英国海軍の敗北と大損害の事実を政府から知らされなかったために国民に伝えることができず、ドイツ側の放送によって事実を知った英国民から非難されることになった。

⁴² 1938 年にリースが BBC 会長を辞任すると、後任のオギルビーはリーダーシップを発揮することなく 4 年後に辞任した。BBC を管轄する経営委員会 (The Board of Governors) は、政府が BBC を情報省の直接の管轄下に完全に置くために全員 (7 名) を辞めさせることがないように説得し、戦争勃発時に委員長と副委員長の 2 名が残留し、委員長のアラン・ポーウェル卿 (Sir Allan Powell) は戦争終結時までその地位を保ち続け、終戦時に戦前の 7 名からなる体制に戻ることにした。John Cain, *op.cit.*, p.42. 参照。

⁴³ 村岡健次・川北稔編著『イギリス近代史—宗教改革から現代まで—』ミネルヴァ書房、1986 年、254 頁、参照。

⁴⁴ Andrew Crisell, *op.cit.*, p.61. 参照。なお、ニュースリールとは映画から借りてきた用語で、ニュースの中に現実感 (actuality) を加えようとしたものである。

⁴⁵ ノルマンディー上陸作戦 (Invasion of Normandy) で用いられた用語「D-day」は作戦決行日を表し、現在では主に作戦開始当日の 1944 年 6 月 6 日について使われる。

⁴⁶ Andrew Crisell, *op.cit.*, p.62. 参照。

⁴⁷ Kevin Williams, *op.cit.*, p.146.

⁴⁸ *Ibid.*, p.146. 参照。

⁴⁹ Andrew Crisell, *op.cit.*, pp.62-63. 参照。

⁵⁰ *Ibid.*, p.63. 参照。

⁵¹ *Ibid.*, pp.63-64. 参照。

⁵² Kevin Williams, *op.cit.*, p.148. 参照。

⁵³ *Ibid.*, p.147. 参照。

⁵⁴ *Ibid.*, p.147. 及び Andrew Crisell, *op.cit.*, p.64. 参照。

⁵⁵ 第二次世界大戦の北アフリカ戦線における枢軸国軍と連合国軍の戦い。第一次会戦は 1942 年 7 月 1 日から 31 日。第二次会戦は同年 10 月 23 日から 11 月 3 日。

⁵⁶ 本稿では、戦時中に BBC が行った海外放送については触れず、国内方法についてのみ言及した。

⁵⁷ この他、戦時中、BBC の機能の多くは地方へ移転したが中核はロンドンにあり、1940 年 10 月 15 日に放送会館が爆撃を受けた時は 7 名の職員が殉職し、放送会館はその後も爆撃を受けたが踏みとどまり、ロンドン大空襲 (The Blitz: 第二次世界大戦中にナチス・ドイツが英国に対して 1940 年 9 月 7 日から 1941 年 5 月 10 日まで行った大規模な空襲。ブリッツはドイツ語で稲妻 (ナチス・ドイツの電撃戦) のこと。) の最中も放送を続けた。

⁵⁸ Kevin Williams, *op.cit.*, pp.145-146. 参照。